



Title	上博楚簡總論
Author(s)	福田, 哲之
Citation	中国研究集刊. 2003, 33, p. 46-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61210
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【上海博物館藏戰國楚竹書關係】

上博楚簡總論

一 上博楚簡の發見

まずははじめに上博楚簡發見の經緯について、馬承源主編『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』の「前言：戰國楚竹書的發現保護和整理」を中心に、その概略を記してみよう。

一九九四年春、上海博物館の馬承源元館長のもとに香港の張光裕教授からファックスが送られてきた。それは香港の骨董市場に現れた竹簡の摹本であり、その中には『易』の一部や文王と周公とに關わる内容が含まれていた。そこで馬氏は張氏にさらに多くの摹本を送るよう求め、あらたに送られてきた摹本によつて、これらが未知の先秦の古籍であり、戰國楚簡の文字と一致することがわかつたため、張氏に購入の斡旋を依頼した。當時、香港は返還前で渡航手続きに二・三ヶ月を要し、竹簡の流出・分散を防ぐ上で、迅速な対応が求められたのである。続いて送られてきた三十数ページの摹本によつて、これらの竹簡はすべて先秦の古籍で、『易』以外の大部分が未

知の文献であることが判明した。そこで、張氏に鑑定結果の要点を連絡し、あらためて竹簡の保存状態や文字の書法・墨色などについてのくわしい報告を求め、それを総合的に判断して、購入が決定された。そして、同年五月、これらの竹簡が上海博物館に送られてきた。さらにその年の秋から冬にかけて、先に購入した竹簡の残欠部とみられるひとまとまりの竹簡が市場に現れた。すでに歳末をひかえて上海博物館には資金がなかつたが、幸いにも香港在住の支援者が共同出資して買い取り、これらの竹簡も上海博物館に寄贈された。

このようにして香港から上海博物館に送られた竹簡は、その後三年にわたつて脱水と汚れを除去する保存処理がほどこされ、一九九七年から整理・研究が進められた。一九九九年一月五日付の中国の日刊紙「文匯報」によれば、竹簡は一二〇〇余簡、字数約三五〇〇〇。内容は儒家・道家・兵家・雜家などの文献八十種余りにおよび、その多くは佚書。八十種の内の主なものには『易經』『詩論』『緇衣』『子羔』『孔子問居』『彭祖』『樂禮』『曾子』『武王踐阼』『賦』『子路』『恆先』『曹沫之陣』『夫子答史舊問』『四帝二王』『曾子立孝』『顏淵』『樂書』などがあるという。

これらの竹簡の正式な報告書は、全六冊として上海古

籍出版社から刊行が計画され、一〇〇一年十一月に第一冊の『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』、一〇〇二年十二月に第二冊の『上海博物館藏戰國楚竹書（二）』が刊行された。第一冊には『孔子詩論』『紱衣』『性情論』、第二冊には『民之父母』『子羔』『魯邦大旱』『從政（甲篇・乙篇）』『昔者君老』『容成氏』の全竹簡の図版・釋文考証が収録されている。また『上博館藏戰國楚竹書研究』（上海書店出版社、一〇〇一年三月）所収の「馬承源先生談上海簡」によれば、第三分冊には音楽方面的内容をもつた著作や道家に関する佚書である『恆先』、最古の『易經』のテキストなど四篇が収録されるという。

二 出土地と書写年代

上博楚簡は、盜掘されて香港の骨董市場に流出したものであるため、出土時期や出土地などは一切明らかにされていない。『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』の「前言：戰國楚竹書的發現保護和整理」は出土地について、湖北省からの出土であるという話が伝わっており、流出した時期が郭店一号楚墓の盜掘時期と接近していることから、郭店墓地出土の可能性も考慮されるが、確証はないという。また、竹簡の年代については、「上海博物館竹簡

様品的測量証明」と中国科学院上海原子核研究所の分析によつて戦国後期という測定結果が出されており、竹簡の内容や字体の検討、郭店楚簡との比較などを総合して、楚が郢から都を遷す（前二七八）以前の貴族の墓に副葬されていたものであろうと推定している。

なお、前述した「馬承源先生談上海簡」（『上博館藏戰國楚竹書研究』所収）には、一二五七士六五年前という中国科学院上海原子核研究所の測定値が紹介されている。一九五〇年を定点とする国際基準にしたがえば、前三〇八士六五年、すなわち前二七三年から前二四三年となり、下限は上述のように秦の白起が郢を占領した前二七八年に設定されることから、書写年代は前三七三年から前二七八年の間と推定される。すなわち、上海博物館藏戰國楚竹書と郭店楚簡とは、戦国時代の楚墓に副葬されたほぼ同時期の資料と見なされるのである。

三 中国古代思想史研究上の意義

現在までに公表された文献の個別的な意義については各論にゆずり、ここでは可能な限り総体的な視点から、中国古代思想史研究における上博楚簡の意義について、儒家思想を中心に述べてみよう。

上博楚簡には、第一冊所収の『孔子詩論』や第二冊所収の『子羔』『魯邦大旱』『民之父母』『孔子問居』を改称)のよう、孔子およびその弟子に関わる文献が含まれている。また『孔子詩論』の「糸文考糸」には「孔子」の合文の検討に関連して、未公表の『顔淵』『子路』『仲弓』の用例が図版とともに挙げられており、上述した「文匯報」には、この他『曾子』『曾子立孝』『夫子答史畠問』なども見いだされる。さらに二〇〇一年八月に上海博物館を訪問した際、中国歴代書法館に『孔子問居』『紺衣』『武王践阼』『周易』とともに『季桓子』と名づけられた竹簡の拡大パネル(各二簡)が展示されており、この文献も孔子と関連をもつ可能性が高い。

一方、同じく儒家系文献を中心とする郭店楚簡の場合には、『魯穆公問子思』『緇衣』『五行』など、孔子の孫とされる子思およびその後学と密接な関連を示す文献が多く含まれている。こうした両者の相違を端的に示す例として、上博楚簡には上述のように『孔子詩論』『民之父母』『子羔』『魯邦大旱』『顔淵』『子路』『仲弓』など複数の文献に「孔子」の用例が見えるのに対し、郭店楚簡には全八〇四枚の竹簡のどこにも「孔子」の文字が見えないという現象が指摘される。もちろん郭店楚簡『緇衣』と上博楚簡『紺衣』、郭店楚簡『性自命出』と上博楚簡『緇衣』

『情論』のように両者に重出する文献があることも十分に認識しておく必要があるが、上述の相違点に注目するならば、郭店楚簡と上博楚簡とは同じ儒家系文献でも系列を異にすると考えられる。つまり、上博楚簡には孔子とその弟子に關わる文献が多く含まれ、しかもその大部分は佚書であるという特色が見いだされるのである。

したがって、上博楚簡の意義の一つとして、とくに初期の儒家思想の形成に関する多くの貴重な資料を含む点を指摘することができよう。また佚書の発見という点のみにとどまらず、偽書としてその資料性が疑問視された『孔子家語』などの伝世文献についても、上博楚簡の発見によって資料批判が進展し、その意義が再評価されるのではないかと思われる。さらに孔子や弟子たちの伝記についても、『史記』孔子世家や仲尼弟子列伝などの伝世資料を補訂する新たな知見が加えられる可能性も高い。

儒家思想という点からもう一つ指摘しておきたいのは、儒教の經典である六經の成立に関する問題である。六經とは、『詩經』『書經』『礼經』『樂經』『易經』『春秋經』の六種をさす。わが国ではこれまで、六經の成立を秦漢以後とみるのが通説となっていた。ところが、郭店楚簡の『六德』『語叢一』に「詩・書・礼・樂・易・春秋」の

(福田哲之)

並称が見られる」とから（ただし『語叢一』の「書」の部分は缺失）、六經の成立が戦国中期以前に溯ることが明らかとなつた。通説における最大の根拠の一つは、『易』の經典化を秦漢以後とする点にあつたが、上博楚簡の中にも多数の儒家関係の著作とともに『易』が含まれていたことによつて、『易』の經典化が戦国中期以前に溯ることが具体的に実証されたのである（この点については、浅野裕一「戦国楚簡『周易』について」〔中国研究集刊〕第二九号、二〇〇一年一二月）参照）。また上博楚簡の中には、『樂礼』や『樂書』など樂に関する佚書が含まれており、早期に亡佚したために長らくその実態が不明とされてきた『樂經』についても、解明にむけて大きな進展が期待される。

以上、上博楚簡の意義について、儒家思想研究を中心にして現時点における見通しを述べてみた。上博楚簡には、儒家系文献以外にも道家の文献である『恆先』や道家との関連が予想される『彭祖』といった文献も含まれておりますり、その他、兵家や雜家などの諸思想に関わる文献も存在するようである。上博楚簡や郭店楚簡などの新出土資料が、伝世資料によつて構築された旧来の中国古代思想史の枠組みに大きな変更を迫ることは、ほぼ確実であるといつてよい。